様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(A)（海外学術調査）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４２５１０１５

研究課題名（和文）パレスチナ自治区鉄器時代都市の社会的、宗教的変化に関する考古学的総合研究

研究課題名（英文）Archaeological Studies on the Social and Religious Changes in the Palestinian Cities

研究代表者
杉本　智俊（SUGIMOTO, Tomotoshi）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：８０３３８２４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　36,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、聖書の代表的な宗教都市ベテル（ベイティン）遺跡の考古学的調査を行った。表面調査の結果、この村には４つの遺跡が集中する地区があることが判明した。
　その内、村の南西に位置するブルジュ・ベイティン地区では発掘調査を行い、ビザンツ時代からアブラハムらを記念する大型の教会堂、十字軍・マムルーク朝時代から小型礼拝堂と農業集落を検出した。ネクロポリスでは約120基の竪坑墓と横穴墓が確認され、それぞれ移行期青銅器時代と鉄器時代からローマ時代にかけてのものであることがわかった。
　こうした情報は、同都市が時代とともにどのように社会的、宗教的性格を変えてきたのかを理解する上で重要である。

研究成果の概要（英文）：We conducted an overarching archaeological investigation in Beitin, Palestine, a village identified with the biblical city of Bethel. We determined four areas in the village where archaeological remains are concentrated.
Archaeological excavations at Burj Beitin, the southeastern hill in the village, revealed a large church from the Byzantine period, which commemorates the biblical patriarchs. The remains of a smaller chapel and the nucleus of an agricultural community were dated to the Crusader and Mamluke periods. Approximately 120 shaft and cave tombs were identified at the necropolis; the former come from the Intermediate Bronze Age, and the latter from the Iron Age to Roman period.
This new data will be significant in evaluating the social and religious changes in the city of Bethel throughout history.

研究分野：西アジア考古学

キーワード：ベテル　パレスチナ　一神教　都市　教会堂　墓　文化遺産

１．研究開始当初の背景

（１）　パレスチナ自治区は、世界文化に大きな影響を与えてきた三大一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）のもととなった聖書の背景の地であり、その歴史的実態を知ることには大きな意味がある。事実、隣国のイスラエル国では積極的な考古学調査が行われているが、パレスチナ自治区は、イスラエルの実効支配のもとにあったため、過去 50 年間ほどまったく考古学的調査がなされてこなかった。しかし、エルサレムやエリコなど聖書と関係の深い町の多くはむしろパレスチナ自治区に位置しており、この地域の考古学的情報の空白を埋めることはきわめて重要である。

（２）　これまで聖書の背景の研究は、主として聖書学や宗教学など文献史的研究が中心であった。しかし、聖書批評学の成果はいまだに一致を見ておらず、各研究者の思想的前提によって左右される面が大きい。そうした中で、考古学的調査によって物質的な資料を得、別の視点からの研究を提供することには大きな意味がある。

（３）　調査対象とするベイティン遺跡は、旧約聖書の中心人物であるアブラハムやヤコブといった族長たちが特別な宗教体験を持った地として知られ、イスラエル王国時代にはエルサレム神殿に対抗する「金の子牛の高き所」があった場所として知られている。また、キリスト教成立後、この地は巡礼地ともなっている。このような遺跡は、当該地域の社会的、宗教的発展を理解する上でまたとない場所である。同遺跡のテルでは、20 世紀の前半にオルブライト、ケルゾーという研究者によって発掘がなされた（Kelso 1968）が、その後は 50 年以上放置されてきた。また、この発掘調査の信頼性の低さはさまざまに批判されてきており(Dever 1971, Finkelstein et al 2009)、現在の水準で調査し直す必要がある。さらに、ベイティン村にはテル以外にも多くの遺跡が存在しており、それらは手つかずとなっている。

２．研究の目的

（１）　以上のような背景をもとに、本研究では、ベイティン遺跡における都市の発達史、特にその宗教的側面を総合的に把握することを目的とした。

（２）　具体的には、さまざまな遺跡がベイティン村全体に広がっているので、その全体像を把握することが最初の目的であった。

（３）　その上で、この都市の発達を明確に反映していると考えられる遺構の特定箇所を発掘することで情報を入手し、聖書およびその後の宗教の発達の背景を復元することを目的とした。

３．研究の方法

（１）　ベイティン村全体の大縮尺の地形図を作成し、組織的表面調査を行うことで、遺跡群の分布を把握し、正確な立地を把握した。地形図作成においては、正確な三角点などが利用できないので、高精度 GPS で基準点を設定した上で、航空写真やトランシットなどを利用して行った。

（２）　聖書関連の伝承の地とされるテル地区とブルジュ・ベイティン地区では、さらに詳細な地形図を作成し、過去の調査地区および現在露出している遺構との位置関係を確認した。その上で、テル地区に関しては、以前の発掘資料の保管されている米国ピッツバーグ神学校ケルゾー記念博物館において資料調査を行った。一方、ブルジュ・ベイティン地区では、実際に発掘調査を行い、聖書時代及びその後の遺構変化の把握を試みた。

（３）　（１）の結果、村南部の谷沿いには 100 基以上の竪坑墓と横穴墓や大型の貯水池、さまざまな農業施設が集中的に位置していることがわかったため、代表的な竪坑墓と横穴墓の発掘調査を行った。これらは、時代毎

の住民の変化を知る上で重要だと考えられる。

（４）　大型の貯水池と農業施設は、３Ｄスキャナーなどで建築構造の把握を行った。谷沿いの水利施設や農業施設がこの地区の共同体においてどのように有機的に機能していたのかを把握するためである。

４．研究成果

（１）　地形図作成と表面調査の結果、ベイティン遺跡には、主として中期青銅器時代からビザンツ時代の都市遺跡であるテル、現存する塔の残るブルジュ・ベイティン地区、テルのふもとにある貯水池、谷沿いに存在するネクロポリス及び農業施設群という大きく４つの遺跡群が存在することが判明した。

（２）　テルの微細地形図と以前のケルゾーらによる発掘調査成果を比較したところ、彼等の報告書で市壁、市門とされている遺構は、テルの頂上部にあたり、その解釈には無理があることが判明した。むしろその地点には別の構造物があった可能性が想定され、今後の調査対象とすべきことがあきらかとなった。また、ケルゾー記念博物館に残されている土器の分析から居住史の再検討を行った。この成果は、すでに論文（雑誌論文⑤）として公表されている。

（３）　ブルジュ・ベイティン地区の発掘調査では、アブラハムやヤコブの伝承が残るにもかかわらず、聖書時代（青銅器時代、鉄器時代）の遺構は確認されなかった。しかし、ビザンツ時代の大型の教会堂（40mｘ28m）が出土し、その中央には記念聖堂が残っていた。これは、ビザンツ時代初期（4 世紀）のヒエロニムスや巡礼者エゲリアが記録している記念教会の可能性が高く、キリスト教公認後すぐにこの場所がアブラハムやヤコブと関連する場所として巡礼地になったことを示している。そのため、この遺構は、当時パレスチナのキリスト教化

写真１　ブルジュ・ベイティン遺跡の塔と教会堂

がどのような過程を経たのかを理解する上でも貴重な資料となる。

この教会堂はビザンツ時代末期に破壊されたが、その後、十字軍時代になって記念聖堂を中心に小さな教会堂が建設されたこともわかった。聖書の伝承が維持されていたためだと考えられる。またその周囲には、以前の教会堂の遺構を利用して農業集落の中核施設が形成され、領主の館である塔も建設されたことがあきらかとなった。最近の十字軍研究では、フランク人たちはただ都市にこもっていたのではなく、積極的に農業共同体を形成していたことが指摘されているが、本遺跡はそれを如実に示す具体例となるであろう。

さらに、その後、マムルーク朝時代になると、記念聖堂はモスクに改変され、支配者が変化しても族長たちの伝承が継続されていたことがわかった。農業共同体も維持されており、十字軍時代以降のイスラーム化の過程を理解する上でやはり有意義な資料となる。

（４）　貯水池と谷沿いの農業集落の立地と構造を把握した結果、テルのふもとにある自然の湧水を貯水池に集め、そこから谷に流して谷底は耕地として利用されていたことがわかった。貯水池の元来の建設時期はビザンツ時代の可能性もあるが、現在の形が整備されたのは十字軍時代のようである。これはブルジュ・ベイティン地区の調査結果と合わせて、十字軍及びマムルーク

朝時代の農村部の発達の仕方を具体的に示すものとなる。

（5）　谷沿いのネクロポリスでは、竪坑墓と横穴墓を発掘した。前者は移行期青銅器時代（前 2300-2000 年頃）のものであることが判明した。これはアブラハムら族長たちの移住との関連で議論されてきた時代である。これまでベイティン遺跡で同時代の居住は確認されていなかったが、今後、この資料はその検討に含められるべきであろう。

横穴墓はヘレニズム時代からローマ時代に主としてユダヤ人によって用いられたロクリ墓であることが判明した。また、その構造は鉄器時代の墓の再利用あるいは継続使用の可能性を示しており、鉄器時代の土器も出土した。ユダヤ人がバビロニア捕囚に連れられた時、少数の者たちがこの地域に残っていた可能性が指摘されているので、もしこれらの墓がイスラエル王国時代からヘレニズム時代まで継続使用されていたとすると、この議論に大きな意味を持つことになる。また、捕囚からの帰還後、ユダヤ人がエルサレムの周囲のどの程度の範囲に居住をしていたのかも議論となっており、その点でもこの資料は重要である。

（6）以上の成果は、パレスチナ人研究者を招聘して 2016 年 4 月 29 日～30 日に開催された国際シンポジウム Archaeology of the Palestinian Territories: Current State and Future Perspectives にて公表され、その解釈および遺跡保存について議論の時を持った（学会発表⑦～⑫）。また、各年度の成果は、初期報告として学術雑誌『史学』及び西アジア考古学会発掘調査報告会にて発表してきた。さらに、個別の遺物や遺構の解釈などは、国内外の学会や研究書、研究論文で公表してきた。発掘調査の中間報告は、近く英文で出版される予定になっている（図書③）。

参考文献

Dever, W. G., 1971 “Archaeological Methods and Results: A Review of Two Recent Publications,” *Orientalia* 40, 459-471.

Finkelstein, I. and Singer-Avitz, L., 2009 “Reevaluating Bethel,” *ZDPV* 125, 33-48.

Kelso, J. L., 1968 *The Excavation of Bethel (1934-1960)* (AASOR 39), Cambridge, MA.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①杉本智俊、菊池実、稲野裕介、間舎裕生「2016 年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』、査読有、87 巻 1-2 号、2017、印刷中

②杉本智俊「2015 年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』、査読有、85 巻 3 号、2016、73-85

③杉本智俊、菊池実、間舎裕生「2014 年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』、査読有、84 巻１-４号、2015、523-536

④杉本智俊「ベイティン（ベテル）遺跡における考古学的調査の課題」『聖書学論集』、査読有、46 巻、2014、61-82

⑤杉本智俊、菊池実「2013 年度ワディ・タワヒーン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』、査読有、83 巻 2-3 号、2014、119-138

⑥杉本智俊、西山伸一、間舎裕生「2013 年度ブルジュ・ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』、査読有、83 巻１号、2014、57-87

⑦Taha, H. and Sugimoto, D. “Beitin: An Open Archaeological Park,” *This Week in Palestine*, 査読無、2013, 52-54

⑧杉本智俊、間舎裕生「2012 年度ベイティン遺跡における考古学的一般調査」『史学』、査読有、82 巻１-２号、2013、105-127

〔学会発表〕（計 18 件）

①杉本智俊、菊池実、稲野裕介、間舎裕生「宗教的伝承の連続性と不連続性―パレスチナ自治区ベイティン遺跡第 5 次考古学的調査（2016 年）」、第 24 回西アジア発掘調査報告会、古代オリエント博物館（東京都・豊島区）、2017 年 3 月 25 日

②Sugimoto, D. T., “Archaeological Excavations at Burj Beitin: General Overview of the First Five Seasons,” *International Conference on Archaeology and Tourism in Palestine, Birzeit*

University (Birzeit, Palestine), March 13, 2017
③杉本智俊「宗教的伝統の継承と変容―パレスチナ自治区ブルジュ・ベイティン遺跡を例として」、アナトリア考古学研究会、武蔵野プレイス（東京都・武蔵野市）、2017 年 3 月 7 日
④杉本智俊「ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的調査（2012 年度～2016 年度）」、パレスチナ考古学研究会、慶應義塾大学（東京都・港区）、2017 年 1 月 28 日
⑤杉本智俊「ブルジュ・ベイティン遺跡における教会堂建築の時代的変化―2016 年度調査報告」、イスラエル考古学研究会、（八王子市北野台５丁目自治会館（東京都・八王子市）、2016 年 12 月 23 日
⑥杉本智俊「パレスチナ自治区ベイティン遺跡における考古学的調査及び遺跡保存活動第一期（2011 年～2016 年度）報告」、文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会、東京文化財研究所（東京都・台東区）2016 年 12 月 7 日
⑦Takai,K.,"Bethel in the Bible,"*International Symposium "Archaeology of the Palestinian Territories: Current State and Future Perspectives,"* Keio University (Tokyo, Minato-ku), April 29, 2016
⑧Kikuchi, M.,"Tombs at Wadi et-Tawaheen,"*International Symposium "Archaeology of the Palestinian Territories,"* Keio University (Tokyo, Minato-ku), April 30, 2016
⑨Watanabe, N., "The Water Facilities of Wadi et-Tawaheen and their Settings," *International Symposium "Archaeology of the Palestinian Territories,"* Keio University (Tokyo, Minato-ku), April 30, 2016
⑩Kansha, H., "Byzantine Church at Burj Beitin," *International Symposium "Archaeology of the Palestinian Territories,"* Keio University (Tokyo, Minato-ku), April 30, 2016
⑪Sugimoto, D. T., "Tower at Burj Beitin: Its Construction Period and Function," *International Symposium,"Archaeology of the Palestinian Territories,"* Keio University (Tokyo, Minato-ku), April 30, 2016
⑫Okada, M., "Protection and Management of Archaeological Sites in the Southern Levant: Case-studies from Palestinian Territories and State of Israel," *International Symposium,"Archaeology of the Palestinian Territories,"* Keio University (Tokyo, Minato-ku), April 30, 2016
⑬杉本智俊「アブラハム記念ビザンツ教会の全容解明をめざして―パレスチナ自治区ベイティン遺跡発掘調査報告（2015 年度）」、第 23 回西アジア発掘調査報告会、古代オリエント博物館（東京都・豊島区）、2016 年 3 月 26 日
⑭杉本智俊「パレスチナにおけるビザンツ時代の終わりと始まり―パレスチナ自治区ベイティン遺跡発掘調査報告（2014 年度）」、第 22 回西アジア発掘調査報告会、古代オリエント博物館（東京都・豊島区）、2015 年 3 月 22 日
⑮杉本智俊「ブルジュ・ベイティン遺跡の塔はビザンツ時代の狼煙連絡用の塔か―カスル・アブ・ルクバ遺跡との比較を通して」、イスラエル考古学研究会、慶應義塾大学（東京都・港区）、2014 年 12 月 20 日
⑯杉本智俊、西山伸一「アブラハムを記念するキリスト教施設？―2013 年度ブルジュ・ベイティン遺跡（パレスチナ）における考古学的発掘調査」、第 21 回西アジア発掘調査報告会、古代オリエント博物館（東京都・豊島区）、2014 年 3 月 23 日
⑰杉本智俊、菊池実「時代を超えたネクロポリス―2013 年度ワディ・タワヒーン遺跡（パレスチナ）における考古学的発掘調査」第 21 回西アジア発掘調査報告会、古代オリエント博物館（東京都・豊島区）、2014 年 3 月 23 日
⑱杉本智俊「「ベテル」遺跡の現状―2012 年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的一般調査」、第 20 回西アジア発掘調査報告会、古代オリエント博物館（東京都・豊島区）2013 年 3 月 24 日

〔図書〕（計 3 件）
①Taha, H. and Sugimoto, D. T., *Archaeological Excavations at Beitin: Interim Report on the 2012-2016 Seasons*, 2017, in print
②杉本智俊「ブルジュ・ベイティン遺跡の塔―その年代と機能」『古代オリエント研究の地平―小川英雄先生傘寿記念論文集』、分担執筆 207-229 頁、2016 年、全 289 頁
③Sugimoto, D. T., "Archaeological Excavations and Development of Tourism at Beitin (Bethel), Palestine," *Japan's International Cooperation in Heritage Conservation,* partial contribution pp. 11-12, 2014, 20 pages

〔その他〕
ホームページ等
"Archaeological Excavations at Beitin, Plestine,"http://youtu.be/V6 B-ukpn6M
「ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査と観光資源開発の研究」http://youtu.be/jZ3ZvniWjB8

６．研究組織
(1)研究代表者
杉本　智俊（SUGIMOTO, Tomotoshi）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：８０３３８２４３

(2)研究分担者

高井　啓介（TAKAI, Keisuke）
東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員
研究者番号：００５７３４５３

渡部　展也（WATANABE, Nobuya）
中部大学・人文学部・准教授
研究者番号：１０３６５４９７

菊池　実（KIKUCHI, Minoru）
東京基督教大学・神学部・准教授
研究者番号：２０２９６３５４
（平成 25 年度より研究分担者）

西山　伸一（NISHIYAMA, Shinichi）
中部大学・人文学部・准教授
研究者番号：５０３９２５５１
（平成 24 年度より研究分担者）

岡田　真弓（OKADA, Mayumi）
北海道大学・創成研究機構・特任助教
研究者番号：８０６３５００３
（平成 24 年度～平成 26 年度研究分担者）
（平成 28 年度研究分担者）

間舎　裕生（KANSHA, Hiroo）
慶應義塾大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：００７３３１１４
（平成 28 年度より研究分担者）

牧野　久実（MAKINO, Kumi）
鎌倉女子大学・教育学部・准教授
研究者番号：９０２１２２０８
（平成 24 年度のみ研究分担者）

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

（　　）